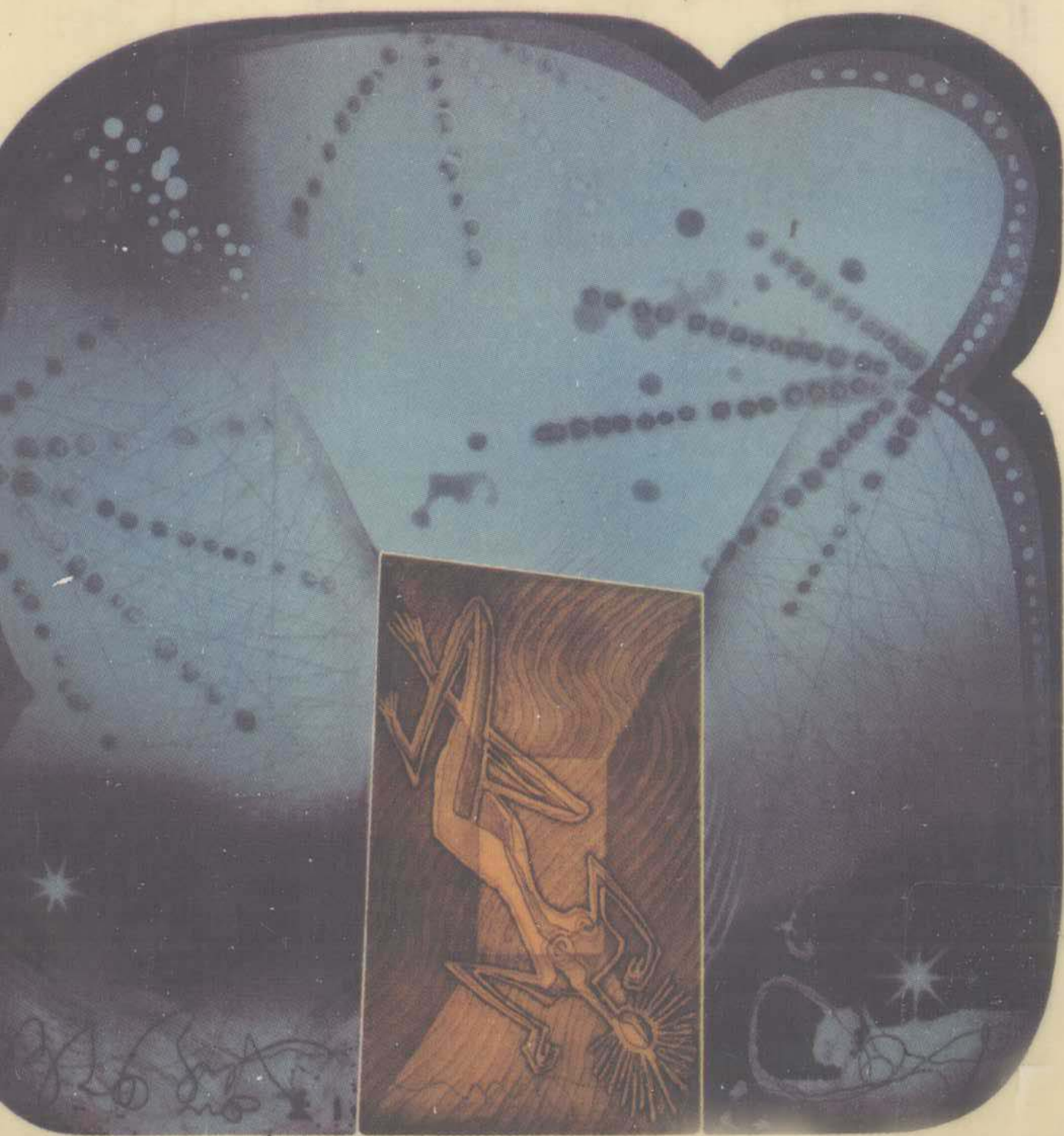


スフィンクスを殺せ

田中光二



早川書房

スフィンクスを殺せ

田 中 光 二

早 川 書 房

493

目次

取りて喰らえ、これは我が体なり…… 七

最後の狩獵^{サッアリ}…… 三五

21世紀のエルドラード…… 七七

スフィンクスを殺せ…… 一七三

解説へ実吉達郎…… 二七

スフィックスを殺せ

取りて喰らえ、これは我が体なり

我は生命のパンなり、我にきたる者は飢えず
我を信ずる者はいつまでも渴くことなからん

——（ヨハネ伝六―三五）

瞑想 I

気付いてみると、右脚がすっかり骨になっているようだった。付け根からきれいさっぱりだ。横たわっている彼の視点からでは、むしろそれを正確に見届けることは不可能だった。しかし彼は、目で確かめるよりも明らかにそれを悟っていた。彼を麻痺させているふしぎなアルカロイドは、全神経を凍結させてしまっている訳ではない。奇妙にバイパスされた感覚が、肉が削られ始めてからこっち、鋭く伝わって来る。自らの肉体の侵蝕のされ具合を、超絶的な理解力で彼はあまさず承知していたようである。

悪い気分ではなかった。むしろその逆だったといえよう。なにごとかの、成就じょうじゅの階段を確実に一歩昇ったかのような心たのしい気分。会心の気分ともいえる。このような心のメカニズムがいつ植え込まれたのかは定かではない。変革はあのととき、自身気付かぬ間にやって来たのだ。真に重要な変革のプロセスというものは、そういうものなのかも知れない。

あのナザレの男の味わった恍惚が、今こそ彼にも分るような気がする。自らの肉体をパンとして

他人に差し出す恍惚。それは精神の高揚状態トランスの最も高い頂きに彼を押し上げ、たぐい稀れた法悦を味わわせた筈だ。

彼は苦しんだのか？ 答えはイエスだ。彼は苦しんだのか？ 答えはしかしノーだ。彼の肉は血を流した。彼の精神はしかし苦悩する余裕があったらうか？

ぼんやりと彼は考え、サフラン色の光を背景に浮び上っている十字架のシルエットを瞼の裏に見る。しかしその固有性アイデンティティを彼は見失おうとしている。それはあのナザレの男のものか。それとも……彼自身に属するものか。

しかし、と彼はまた考える。

すべてのプログラムは、彼があゝの“犬の世界”キンド・カー*に存在していたときから定まっていたのかも知れないのだ。

ゲーム

操縦席前方を、白茶けた砂漠の表面が、凄まじい勢いで後方へと流れ去る。高度五十メートルで砂漠上空を掠め飛んでいれば当然の情景だ。しかし彼の三半規管はそのめまぐるしい眺めに酔っている暇はない。

ちらりとキャノピー越しに頭上背後を仰ぎ見る。予感どおり“敵”はそこにいた。高度を利し、

だ。

逆おとしに突っ込んで来るところだ。その肝^カっ玉^ツだけは賞め讃えなければなるまい。超低空で飛んで来る彼の機にそんな突っ込みをかけるからには、よほど引き起しの技術に自信があるのだろう。

その黒い翼端が閃光を閃めかせる。彼の反射神経も誇るに足るものだ。すばやく機——P51 Mustangを左右に滑らせる。左の翼の上を「敵」の機銃の曳光弾がきわどくなめてゆく。彼は Mustangの機首を思い切り大胆に引き起す。機のすべてが歯軋りに似たバイブレーションを起こしつつ蒼穹に舞い上る。チューンアップされたレシプロ・エンジンがその騒音^{ノイズ}の極致を奏でる。

今度はこちらが弾をお見舞いする番だ。勢い余って彼の下を掠め、百メートル前方を、地表を這うようにしつつ必死で遁走する「敵」——グラマンF8F2——を機銃の照準線におさめる。数瞬前の彼を真似てジグザグを続けつつ火線から逃がれようとするグラマンを、舌なめずりしつつ、執拗に彼は追う。

恐怖に耐えかねて「敵」が機首を起そうと試みるときが最後だ。その姿を大きく「敵」は彼にさらす。ほとんどオルガスムスにも似た表情を浮べて、彼は機銃の発射ボタンを押す。押して押し続ける。残った全弾をグラマンに射ち込む。発射の反動が肉体的な手応えとなって彼を揺さぶる。「純粹時間」にそのとき彼は生きているのだ。

グラマンはふとよろめく。ガソリンの漏洩が一瞬白い筋を曳き、次の瞬間真紅の花が宙に咲く。グラマンは四散し、無意味な鉄板やボルト、プラスチックの破片となって大地に堕ちてゆく。パラシュートの白い花が咲く様子はない。あまりに高度が低すぎ、何よりも破滅の瞬間が唐突すぎたのだ。

その認識は彼の心にどんな悼^{いた}みももたらさない。すべてはルールに組み込まれているのだ。死は、そのルールの前提でしかない。

彼はゆったりと四囲の空を見回す。すでに空は潔められている。

“敵”のことごとくを、すでに彼ははたき落したのだ。ノースアメリカン一機、スピットファイヤ一機、ロッキード・ライトニング一機、そして今のグラマンF8F2。悪い成績ではない。彼の愛機ムスタングP51の機首に描かれた星のマークは、今日さらに四個増えることになる。この分では今年の“撃墜王^{キルキング}”の座は、九分九厘手中にしたともいえるだろう。

彼は前方を注視する。高さ五十メートルの巨大なポール——パイロンが視界に飛び込んで来た。赤と白に塗り分けられた二本のパイロン。ゴールだ。柱^{ゴール}の下にひしめく人々の熱狂がちらりと目に入る。勝ち誇ったように翼を振りつつ彼はパイロンの間をすり抜ける。

——かつてはこれは彼の愛したレースだった。すでに超^{スーパー}古典^{クラシック}となった戦闘機……第二次世界大戦時に使われたレシプロ戦闘機を復元してのエア・レース。苛酷なレースだ。なぜならば勝者は常に一機でしかないからだ。距離約二百キロの砂漠上空を往復し、いくつものパイロンをくぐり抜けてつ、戦闘技術を競い合うレース。エンジンは可能な限りチューンされ、機銃には往時とひとしい実弾が装填される。勝ちぬく者は必ずしも性能の優秀な機とは限らない。パイロットの技倆が大きいものをいうのだ——それと恐らく、死に向って平然とウィンクしうる野放図な胆^{ガツ}っ玉^ツとが。

華麗で、しかも嘔吐的なレース。途方もない富と、時間と、そして死と戯れうる遊惰とをかねそなえた者だけがこのレースに参加しうる。つまり、この人生に退屈し切っている“超貴族”たちが

だ。

彼はその最右翼だったといえよう。少くとも、最初の数カ月はそうだった。機と一体となって、空中格闘を繰り上げていた間、時間は稠密^{ちゆうみつ}だった。完璧に張りつめ、黄金の質量を味わせてくれた。が、彼の恐れていたことがやって来た。風化が始まったのだ。それはひび割れ、その艶を失い始めた。氷のように彼の掌の上で融け出し、いちどそうなると加速度的に滅びの一途を辿った。そうなると止めようがないことを彼は知っていた。

今、パイロンの上を誇らかに飛び越えつつ、彼はその最後の小片がついに融け去ったことを知った。世界が灰色と化す瞬間。おそるべき眩暈のその一瞬を辛うじてやりすごし、額の脂汗をぬぐいながら彼は呟いた。

—— “犬<sup>キンド・カウ*
ド</sup>の世界”。この世界など、犬にでも喰われてしまえばいいのだ。

コロサス

意識は生きている。ある種の狩獵蜂の巧妙な毒に似て、全運動神経を麻痺させながら肉を新鮮なままに保つ。哀れな青虫は、自らの体液に充ちた肉が、体内にひそむ寄宿者によって啜り取られてゆく様子を、意識の耳をしいんと澄ませながら知覚し続けなければならない。——むろん、そいつに意識というものがあればの話だが。

彼には意識はあった。この上はないほど澄み切っていた。意識だけの存在に収斂^{れん}されていたのだ。彼はふと自問する。いわば存在をぎりぎりの原点まで縮少し、その輪郭を確かめつつ、自己の核心と対峙^{たいし}するかたち。精神の存在^イ基質^ダとの対話。このようなかたちの緊張を持ったことが、今までにあったらうか。

——今までの俺は、自我を拡大することのみに狂奔していた。シジフォスの尽きざる餓えが俺を衝き動かしていた。いわば侵略主義の悪弊におちいつていたのだ。版図をひろげることとそれを支えるより大きな領土が必要となる。……感覚と、そして情念のすべてを増幅し、そのパノラマの中に新たな自我を発見しようとする試みは果てしなかった。"行為"の灼熱する瞬間に身を浸し続けようとする試みも同様だった。

手中におさめたすべての花は、指が触れると同時に色褪^あせ、灰燼^{かいじん}と帰した。ミダス王の奇蹟の指とうらはらに彼の指は欲望するすべてのものを一握りの灰に変える魔力をそなえていたかのようである。

彼は化学に助けを求めた。精神の因果律を解き放つ^{サイヤデリックス}幻覚物質^{サイヤデリックス}を、こととして超空間に跳躍しようとした。それが彼の存在のエントロピーを加速させ、崩壊にみちびき、どうしようもない混沌^{カオス}を現出させることすら願った。すべては徒勞^{たうらう}だった。人間は永遠に虜囚^{たなごころ}である。一時は跳躍^{ジャンプ}しえたかに見えても、所詮は"すべてをしるしめす"釈迦^{しやくか}の掌^{たなごころ}の上から脱がれることはかなわないのだ。

しかし、いまはもう彼は外へ向おうとはしていない。内へ、存在の核へと凝縮しようとしている。その過程で、ひどく澄んだ鐘の音が鳴り始めたのだった。

——彼はうっすらと半眼をあける。首から上の筋肉は辛うじて動くのだ。淡い、弱々しげな陽光が彼を包んでいる。黄ばんだ空が視界を充たす。季節は定かではない。この星の四季はそのリズムを失いひとしなみににぶい冬の空に統一されてしまったかのようだ。

彼は自らの横たわっている場所をぼんやりと思い浮べる。荒涼とした砂漠の縁。ひねこびた矮樹の藪が点綴する乾き切った大地。高さ数メートルの蟻塚状の塔がその間に散在している。はるか遠景、砂漠のかげろうの果てには廃墟が浮かび上って見える。龐大なコンクリートと鉄、その他もろもろの人造物のなかば溶解した堆積。底知れぬ奥深さを持つ黒い骨の森。

それらは彼の記憶に残る情景だ。彼が、いわば“涅槃”の境地を大地に得る以前の彷徨で見出したものだ。それはもう信じがたいほどはるかな過去の記憶のようだ。

声が聞える。

「巨人よ、あなたとまた話がしたくてやって来ました……」

その声は右の耳のすぐ脇で聞こえる。ごくささやかな声量しか持たぬ者が、拡声器を通じて力を限り叫んでいるような声音だ。彼は這うような動きでゆっくりと眼球を動かし、辛うじて視野の隅に、組んだ櫓の上に立っている高さ十五センチに充たぬ人間の姿を認める。

彼 女

何が彼にその決心をさせたのかは必ずしも定かではない。しかし直接の契機となったのは彼女の死であったようだ。

彼の指はともかくとして、彼の富はじつはミダス王そのものだった。触れるもののすべてが黄金に化すというあのゴールドフィンガーの持主。富は自己増殖のメカニズムを持っている。あるスケールに到達すればの話だ。彼の場合はその分岐点をはるかに凌駕していた。彼のコンツェルンは高速増殖炉のように富を再生産したのだ。破局の予兆が世界を締めつけていようとも、富の遍在という既成事実が微動だにしなかった。

彼は富み続け、それは彼の制御の及ばぬ怪物となって一人歩きしており、彼はそれとかかわることをむしろ諦めていたといっている。

彼はその女を愛した。たとえ始末の悪い大富豪スーパー・リッチであろうとも女を愛する権利はある。彼女は明らかに他の女とは違っていた。つまり、彼に微笑を惜しみなく与えつつ、指をさしのべて彼の背後の富に触れようとする無数の女たちとは違うと思われた。

彼女は彼のために純粹培養されたのだと彼は信じた。カリブ海の小さな島で、彼女は見出されたのだ。陽光と珊瑚礁の青がはぐくんだ、ただひたすらに生きる、ことしか知らぬ存在。気まぐれで、情念のみに従う、苛烈な純粹さを持った野生フンタインの女。何であろうと彼女の首に軌くみをつけることは不可能だったろう。

彼はそれを試みた。与え、与え続けることによって彼女を鎖につなごうとしたのだ。初め、それは成功したかに見えた。どんな女にも好奇心というものはあるからだ。